

Title	明治日本における石井十次と救世軍に関する一考察
Sub Title	Ishii Juji and the Salvation Army in Meiji Japan
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.22 (2011.) ,p.52(23)- 74(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20120331-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治日本における石井十次と救世軍に関する一考察

小野修三

一、はじめに

ロンドンの救世軍資料館⁽¹⁾所蔵資料のなかに、一九七九年七月一二日付のメモが挟まった『日本における救世軍』との日本語の小冊子がある。その「南太平洋および極東地区」次官L・E・グリンステッド少佐からロンドンの救世軍本営ハル大佐補に宛てた英文のメモには「日本国軍にて公開の小冊子⁽²⁾」を同封する旨が記されている。この日本語の小冊子のなかの「日本における救世軍の歩み」の箇所は一八九五年（明治二八年）九月に横浜の地に初上陸したライト大佐一行のことに言及するに先立ち、次の一節が記されている。すなわち、

「明治天皇は才能力量ある人物を選抜して海外に派遣したが、その中に救世軍の創設者ウイリアム・ブース大將著『最暗黒の英国とその出路』を手に入れたものがあり、これを読んで大いに感動、啓発され、その友人である社会事業の先達、岡山孤児院創設者石井十次氏に、これは先頃欧米諸国で評判になつている書物であると一冊送り届けた。折りから病床にあつた石井氏は自らこれを読むことが出来ず、その当時、同志社に学んでから郷里岡山に帰り伝道をはじめていた青年山室軍平に、この書物を読んでくれるように頼んだ。山室は読んでいる最中、神がいかに献身した人物を用いるか、その幻に魅せられてしまったのである」。

ブース大將著『最暗黒の英国とその出路』は一八九〇年（明治二三年）秋⁽³⁾の出版物であるが、出版一年半の明治二五年四月末に石井

十次は『石井十次日誌』によれば、京都・同志社病院に入院⁽⁴⁾しており、その入院中の五月四日に「ブース氏最暗の英国を同志社山本君より読んでもらえり」⁽⁵⁾と記している。五月二三日にも「自山本君ブース氏最暗の英国罪人篇を聴く」⁽⁶⁾とある。山本君とは山本徳尚(『人道』三〇一号、昭和五年十一月発行「山本徳尚氏追悼号」、とくに山室軍平「山本君を偲ぶ」参照)のことであり、その山本徳尚による訳述の席に山室軍平は居合わせた。山室は大正二年石井に対する追悼の辞のなかでこの出来事を次のように述べていた。すなわち、

「明治二五年の初夏の頃であつた。君は病を得て京都の同志社病院に入られた。その節は毎日同志社の一上級生に依頼し、枕頭にて故ブース大将の名著『最暗黒の英国』の意訳をして貰い、之を聴聞せられたので、私は又毎日鉛筆とノート、ブックを持つて行つて、傍から之を筆記したのであつた。かくて君は右の書中から、孤児院の経営上に多く学ぶ所があらると共に、私は又後終に身を救世軍に投ずることとなつたのである云々」⁽⁷⁾。

『石井十次日誌』の明治二五年五月二三日からは同二八日まで、毎日「ブース氏最暗の英国」のことが記され、五月三〇日に退院して岡山に帰郷してからも、六月一二日に「小野田(鉄彌)君よりブース氏救助策をきく」⁽⁸⁾との記事があるので、石井は救世軍に関してはこの明治二五年五月、六月という時期に初めて知ったかの印象であるが、それ以前に小河は救世軍に関する知識を別の経路から得ていた。

と言うのは『最暗黒の英国とその出路』出版から半年も経たない明治二四年二月二〇日の『石井十次日誌』には同年二月発行の『聖書之友月報』(第三八号)「救拯軍の女將軍 ブース夫人伝」⁽⁹⁾(無署名)を、また同じく同年二月発行『六合雜誌』(第一二二号)掲載の雑誌報「將軍ブース氏廢人利用策」⁽¹⁰⁾(無署名)を、それぞれ読んだことが記されているからである。そしてその明治二四年二月以降の『石井十次日誌』には「救世軍」、「東洋救世軍」といった語句が何回も見られ、一〇月七日の箇所では「孤児院は即ち東洋救世軍の士官学校なるぞかし」⁽¹¹⁾と記され、一〇月一八日に至ると「東洋救世軍高梁進撃を決す」⁽¹²⁾とある。続く同一九日から二三日まで、その高梁での事柄が記されているけれども、この「進撃」の様子は『日誌』よりも明治二四年十一月一二日発行『福音新報』第三五号に掲載された高梁教会十年期祝会の模様を伝える記事の方がはるかに詳細である。『福音新報』から引用しよう。すなわち、

「(一〇月二〇日)午後二時より牧師古木(虎三郎)氏の司会を以て十年期祝会を開く(中略)さて当日の記念会を祝する為め石井十次兄は孤児院抜群の孤児二十四五人と岡山英語学校中精神に富める生徒十四五名とより東洋救世軍なるものを組織し少しも軍隊の仕組みに異ななく挙止静動各規律あり歩停集散悉く喇叭をもつてす之れを引率して十有余里の道程を遠しとせずしてその前夜に来らる(中略)当日午後の集会の終るや直ちに会堂の庭内に於て勢揃ひをなし数分間軍歌を謡ふて操練し夫より士官と覚はしきもの一枚摺の説教を弾丸とし渡せば各々順序を踏みて受け取る悉く行き渡るや否や将校の号令を掛ければ東洋救世軍と書せる旗を翻へし喇叭を吹ひて市中へ出陣す此の時見物人は山を築けるが如し而して市中の中央へ達すれば士官の令に従ひ兵士は一枚摺の説教をば誠に手早く毎戸に一枚宛を配^{ママ}り歩くを以て戦争となす殆んどその弾丸の尽きしと思ふ頃喇叭卒は喇叭を吹く之れを耳にする孤児なる兵士は一生懸命に馳せて旗下に集合す皆な聚まれば少しく列を進め往來の妨げとならざる場所に停まり大将石井兄を始め其他士官或ひは兵卒なる英語学校生徒及び孤児交るく路傍説教をなす聴く者感ぜざるはなき有り様なり殊に注意を惹くは石井兄がその軍隊中に持てる黒、赤、白の三旗を前に立て雲為す聴衆に向ひ云はれるは『この黒旗はこれ人の罪を示せる者云々この赤旗は諸君の罪を購ひ給ひし基督の血を表はすもの云々この白旗は罪赦されて潔白になれる様を指すもの云々』とこれなり終れば駆け足にて進み適當の場所に停まり前の如く毎戸に一枚摺のものを配^{ママ}りて戦争の状を為す斯くて二千内外の戸数を洩らしなく配^{ママ}り畢れば退軍の喇叭を吹き軍隊は凱旋を唱へて本陣なる止宿所へ帰還す夜は路傍演説のみに出陣し処々に於て為すこの際会堂内は聴衆群衆して立錐の地なく之れが為め高梁町内一般は昼夜宗教の大戦争即ちリバイバルの況情なりき」⁽¹³⁾。

また明治二四年度『石井十次日誌』の巻頭に収録されている写真版にて、明治二四年二月一日付の岡山日報に「岡山孤児院内東洋救世軍」からの「岐阜愛知等震害地孤児義捐金」報告書が広告として掲載されていたことが読み取れる。先の山室軍平の追悼の辞にも「君は又かつて『東洋救世軍』の名の下に孤児院の経費募集に尽力せられたことが」⁽¹⁴⁾あり、そして「日本の救世軍が東京横浜の次に、早くも備前の岡山に支部を置くことになったのは、殊に君がその地に居られたためである。かくして日本救世軍の最も旧く且つ最も頼母しき軍友であった」⁽¹⁵⁾と、東洋救世軍当時からの石井をそれとして明確に認知していたことが読み取れる。

このように石井十次は明治二五年初夏に『最暗黒の英国とその出路』を訳してもらってその内容を聞く以前に、それ以外の経路でブ

ース夫妻について、また救世軍について相当程度既に知っており、かつ実際に右の引用のように「東洋救世軍」の旗のもと対外的な組織的活動を行なっていたわけである。たしかに『最暗黒の英国とその出路』の内容理解は明治二五年初夏に進み、小冊子『日本における救世軍』の記述それ自体は間違っていないのだが、本稿ではまず前年の明治二四年二月における救世軍に関する（それ以外の経路）の調査を行ない、次にブース大將著『最暗黒の英国とその出路』がどんな内容の書物であったかを、特に『六合雜誌』掲載の雜報「將軍ブース氏廢人利用策」における説明と関係づけながら紹介し、出版後の明治二四年、二五年当時の石井と救世軍の関係について若干の考察を試みたいと思う。なお明治日本における救世軍との関係では、石井による「東洋救世軍」と並んで、島貫兵太夫による「東北救世軍」も論じなければならないが、今回この点は論じないことにする。⁽¹⁶⁾

二、『聖書之友月報』と『六合雜誌』

まず第一に明らかにすべきは石井十次が明治二四年二月に読んだ『聖書之友月報』の無署名記事「救拯軍の女將軍 ブース夫人伝」、そして『六合雜誌』の無署名記事「將軍ブース氏廢人利用策」を執筆したのはそれぞれ誰であり、その情報源はそれぞれどこにあったかである。

聖書之友とは『日本キリスト教歴史大事典』（教文館）によれば、ロンドンに本部があり、日本では明治一七年一月一日に正式に発足した団体⁽¹⁷⁾で、教派にとらわれずに聖書を読むことを広めることを目指していた。日本では赤坂病院長ドクトル・ホイトニーとその妹が中心となって活動が始まった。『ドクトル・ホイトニーの思ひ出』（昭和五年）にはこうある。すなわち、

「聖書の友は世界各地に支部があるが、その会員は主として少年少女及び青年者であつて、日本ののは全くこれと選を異にしてゐる。アデレイデ・エス・ホイトニー——当時十六歳の少女であつた——が日本で聖書の友を創めようと思ひ立つたが、東京に在る若い自分の仲間内のことはかり考へて、一体幾人位入会してくれることやらと思つてゐる所へ、日本人初期の基督者の一人である

津田仙翁が偶然氷川町五番地へ訪ねて来て、『何をしていraftしやる』。『すばらしいことだ』。『何故俺等に相談して下さらないのか。俺等はみんな若い。一番年とつてゐるのでも基督教信仰に入つてから十二歳乃至十五歳以上にはなつてゐないのだ。それこそ正に俺等の要求するところだ』。この言葉に少なからず励まされて、彼女は一層手を上げる気になり、いつも重荷の大部分を背負つて立つてくれた兄ドクトル・ホイトニーに手伝はれ、兄妹力を協せて、折柄催されようとしてゐたルーテル誕生四百年記念の大集会を、聖書の友宣伝及び加入勧誘の絶好の機会として、利用する計画を立てた⁽¹⁸⁾。

これは明治一六年、一七年当時のことであるが、さらに『ドクトル・ホイトニーの思ひ出』に頼つてドクトル・ホイトニーその人について見ることにしよう。同書にはこうある。すなわち

「ドクトル・ホイトニーは、日本にあること久しく、練達せる日本語学者として且立派な医師である。米国公使館員ではあるが、余暇を以て特に貧民階級のための病院を創設し、多年秩序正しく経営してゐる。東京には沢山の病院があるが、孰れも皆薬価及び診察料を徴集して居り、ひとり貧しき患者を容るゝものは東京市内たゞ赤坂区のこの病院あるのみである。／＼一病院の管理となると誰にしても余暇を以てする仕事としたら手一杯かゝると思はれるのに、これはドクトル・ホイトニーに依つて遂行さるゝ愛の事業の唯一少部分であつて、彼は聖書の研究及び普及は基督教事業の最も重要なものと思惟し、茲に於て日本のために聖書の友を募る計画を立て、大成功裡に約一万二千人の会友を得た⁽¹⁹⁾」。

ホイトニー兄妹の活動によつてロンドンに本部のある「聖書の友」と日本の間に情報の伝達ルートが作られていて、それに乗つて救世軍に関する情報も遅滞なく、日本の「約一万二千人の会友」に届けられていたことが理解される。石井十次もその「一万二千人の会友」の一人として明治二四年二月号「聖書の友月報」掲載の「救拯軍の女將軍ブース夫人伝」を読んでいたと言えよう。

ところで、ホイトニー兄妹によつてロンドンから調達された情報は英語で表記されていたはずで、実際にはそれを読み、日本語に翻訳することの出来る人たちがホイトニー兄妹の周囲にいたことになる。この点でも『ドクトル・ホイトニーの思ひ出』に頼ろう。同書に収録されているドクトル・ホイトニーへの追悼の辞のなかで竹越與三郎はこう述べていた。すなわち、

「小生は明治二十二年ホイトニー君と日々接近したる事有之候、其時同君は赤坂氷川町に住居せられ米国公使館の通訳と眼科病

院長とを兼ねられ、其傍ら聖書之友と称する団体を作り、基督教の各派を通じて同日に同一の聖書の或る部分を読誦勘考することを企てられ、而して此会員には時々リーフレットを配布するを常とし、小生は其リーフレットを英文より日本文に翻訳することを依頼せられ、其他雑務を手伝ふ為め日々同君の家に出勤致候云々⁽²⁰⁾。

竹越は明治二四年には既に民友社に入社しており、国民新聞の編集に従事していたので、その当時『聖書之友月報』の仕事を手伝っていたとは思われないが、竹越に匹敵するようなキリスト者で相当の知識人が翻訳係を引き受け、「救拯軍の女將軍 ブース夫人 伝」も執筆していたはずである。この記事の内容は『最暗黒の英国とその出路』の紹介ではなく、「教会に往かず説教を聴かず救ふに道なきの徒に主の福音を宣べんとする義勇慈善の事業は今や満天下に広がり三十二個国に行渡る之を総称して救拯軍と名く⁽²²⁾」と書き出し、「此大事業の創設者発起者は誰ぞ英国メソジスト教会の一宣教師ブースと其夫人なり而して夫人は客秋世を去り良人は尚熱心事に当る⁽²³⁾」と記していた。

次に『六合雑誌』（第二二二号）掲載の雑報「將軍ブース氏廢人利用策」について言えば、当時の同誌編集長は横井時雄で、当該記事は無署名であったが、ブース大將著『最暗黒の英国とその出路』（原著本文二五八ページ）の内容に係わるものであった。

佐波亘著『植村正久と其の時代』第三卷（昭和十三年）はその第四節「福音新報」の個所に「基督教徒の新聞雑誌及び其の記者」という植村の文章を収録している。そのなかで「余輩の記憶する所に拠れば、基督教の新聞として最も早く現はれしものを神戸の『七一雑誌』とす。（中略）関東の方にありて基督教の定時刊行文学に従事せし手始は、今囚徒の教育事業に熱心せらる、原胤昭氏とす。氏は曾て自己の資材を捐て、女学校を設け、十字屋と云へる基督教の書籍店を開き、盛んに宗教書の出版などをなして、伝道の助けとなりしもの少からず。其の計画によりて發行せし雑誌を『東京新報』と云ふ。（中略）次に現はれたるを『六合雑誌』とす。其の始めは基督教を正當に宣伝するの牙宮として天下の耳目を集むるに足りしも、後幾變遷して終りにユニテリアンの機関となりたる『六合雑誌』は如何にして成立するに至りしか云々⁽²⁴⁾」と。

植村正久の文章をさらに引用しよう。すなわち、

「明治十三年の春の事かと覚ゆ。京橋鍛冶屋町なる小崎弘道氏寓居（講義所）の一室に数名の基督教の青年信徒会合を催ふせり。

青年とは言へ、湯浅治郎氏、吉田信好氏の如き、立派に一家を成せる紳士等を其の席に見受けたり。彼等は種々評議せし結果東京青年会なるものを組織せり。(中略) 東京青年会は更に進んで『六合雑誌』と云へる雑誌を発行することを決議せり。発行編輯所は十字屋の楼上と定め、小崎(弘道)、田村(直臣)、植村(正久)の三氏其の編輯と事務とを担任し、明治十三年十一月十一日を以て其の第一号を発行せり。(中略) 松村仲石氏が尚ほ築地のジョン・バラ氏の学校に在りし頃『秋夜虫声を聞く感あり』の文章を掲げて、文学的初陣の功名赫々たりしも、『六合雑誌』初期時代の紙面にてありき。是等に比すればや、後れて『六合雑誌』の紙面に現はれし名家の中に竹越與三郎氏あり⁽²⁵⁾。

このように六合雑誌の誕生を説明し、筆はさらに小崎弘道が提唱した「基督教の文学出版会社」たる警醒社の設立、そしてその警醒社の事業としての基督教新聞(東京毎週新報改題)のことに及び、植村正久はその基督教新聞の記者としての横井時雄を次のように説明する。すなわち、

「基督教新聞の記者として其の重もきをなせし一人として記憶すべきは横井時雄氏なり。氏は品格よき一個の紳士にして、才氣縦横、小崎氏に比して文学的の技倆や、優るものあり。就中九州人の特質として、時事に注目し之を政治的に觀察するの傾向に富みたり。其の心は軽快に動くに妙なり。(中略) 同志社に入りて新島氏の補助者となりしが如き、金森氏の著書『今の基督教及び将来の基督教』の出づるや、之を駁撃して『国民の友』に手痛き批評を試みたる如き、やがて自らも金森氏と同一の意見を抱くに至れるを曝露し謹厚なるユニテリアンよりも甚だしく基督の教旨に遠ざかりし態度にまで進みたるが如き、氏の経歴はマインドの軽快なるのみならず、其の信仰的生活の動作もまた頗る軽快なるものなきかを疑はしむるに非ずや」⁽²⁷⁾。

「將軍ブース氏廢人利用策」が明治二十四年二月発行『六合雑誌』(第一二二号)掲載された際に、同号には「日本人民の徳育問題 横井時雄」、「三位一体の説 小崎弘道」、「カイク氏の約翰傳論 金森通倫」などが掲載されていた。植村の言う、金森の『今の基督教及び将来の基督教』とは、正しくは『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』(明治二十四年六月)であつたが、そして同書を批判して『国民之友』に寄稿したという横井の文章が何であつたかは不明であるが、キリスト教理解という点ではまさに小崎が『六合雑誌』(第一二二号)で論題としていた神と子と聖靈の三位一体の考え方の受容において、小崎と横井・金森との間に距離が生れていたと言えよう。

小崎はこの「三位一体の説」のなかで「神の示現にして三位一体なりとすれば其実体の本質に於ても亦三位一体なるを承認せざるを得ず」⁽²⁸⁾と述べ、三位一体の立場に立っていた。これに対して横井は「日本人民の徳育問題」のなかで「基督教はキリストと云ふ完人物を掲げ以て各人の理想を示し、人としてキリストに在つて宇宙の上帝と親和せしむ可し（中略）基督教とはキリストを信して宇宙の神と親和し此信仰の力に由りてキリストの如き人物となるに在り此れ実に基督教の生命にして其他は有ても善し無くても善し」⁽²⁹⁾と述べ、キリストが人であると主張し、三位一体の立場から離れ、「自らも金森氏と同一の意見を抱くに至れるを曝露し（中略）ユニテリアン」の領域に既に踏み込んでいたと言えるのではないだろうか。

この時点では、したがって、横井は『六合雑誌』の編集長としては、ユニテリアンの立場と正統的な立場の両方の記事を掲載していたということになるが、無署名記事「將軍ブース氏廢人利用策」を執筆したのは一体誰だったのだろうか。明治二十四年二月発行『六合雑誌』それ自体には何の手懸かりもないが、植村正久の明治二〇年代初期の履歴を見ると一つのヒントがあるかも知れない。というのは、植村は「明治二十一年の春から二十二年の初頭にかけて約九か月あまり、アメリカとイギリスに遊学」⁽³⁰⁾していたからである。

これまで引用して来ている佐波亘著『植村正久と其の時代』第三卷、第一四節「福音新報」において『日本評論』第二号（明治二十三年三月）掲載の「英国新聞記者ステッド氏」と題された植村の文章が収録されている。すなわち、

「氏は『ベルメル・ガゼット』新聞記者にして倫敦の操觚社会に声名甚だ高し殊に社会の風俗を改良し婦人の清潔を増進する等の事業に付ては世の攻撃罵詈雑家貴紳の嫌惡を物とせず直論譏議して大に貞良正義の道を振張したり然のみならず前年来其の東方問題に関して魯西亞の国状を説き英國の外交策を論じたるなどは頗る世人の注意を喚起したるもの、如し然るに氏は昨年の暮に至り『ベルメル』社を辞し去ること、なりしと云ふ其事は当時東京の新聞紙にも見えたり近着の英國毎週新聞を閲するに曰く／＼ステッド氏は『ベルメル・ガゼット』新聞を辞して別に『評論の評論』なる一新聞を起すべし氏の才学と筆力とを以てする事ゆえ其の新事実の前途は必定大なることならん（中略）或る人（原注 植村正久）往年英國に遊び一夕ステッド氏の家に宿泊したることあり、しかして、今其の日記を獲たれば、（中略）千八百八十八年十一月二日余友人某氏と打ち伴て、『ベルメル・ガゼット』の記者ステッド氏を訪ふ。其の家はロンドンを距ること遠からず、ウインブルドンに在り。夜の六時頃其の家に至る。主人歓待至らざ

る所無く、其の人に接する、毫も篇幅を修めず、実に平民の友なりと見ゆ。晚餐已果て炉辺に団座して、種々の物語す。主客興に乗じ談論湧くがごとく、共に更の闇るを忘る。(原注 時は明治二十一年で、同行者は島田三郎⁽³¹⁾)。

このベルメル・ガゼット紙の記者であったウィリアム・ステッド William Stead の自宅に一泊させてもらって語り明かした話題のうち、キリスト教に関して、同紙で共に編集に携わったジョン・モルレイの言動として、植村は次のように回想している。すなわち、

「ジョン・モルレイが基督教を信ぜざるは、其の説く所、此の世界の実状に比べて、余り美しきに過ぐるものありと思へばなり。『ベルメル・ガゼット』の編輯室に在りて世の惨悪、兇暴、悲哀を秘めたる事実の報に接すれば、彼毎に嘆息して曰く、嗚呼果敢無き世なるかな。人生は悲哀を以て充滿せり。慈悲愛憐の神あらば、争でか斯のごとき世界を作るべきと。是れ其の基督教を信ぜざる所以なり。ジョン・モルレイがオックスフォードの大学に在りしは、ミルの勢ひ日の出の若くなりしころにてありき。彼はミルの不信説に感化せられし所多し⁽³²⁾」。

同じキリスト者として植村はステッドと共感し、明治二年以後も交流は絶えることがなかったと想像される。つまり、明治二四年当時『六合雑誌』は横井時雄が編集長であったが、少なくとも同誌の創始者の一人であった植村を通して、欧米のジャーナリズムとの間の連絡は常に取られていた、と考えられるのではないか。まさに明治一三年一〇月の創刊時の「六合雑誌発行ノ趣意」ではこう表明されていた。すなわち、「(前略)世ニ有益ナル論文記事ハ博ク内外ノ諸大家ニ計リテ之ヲ此雑誌ニ掲載シ其他内外賢哲ノ伝及ビ歴史上ノ記事等凡ソ風教ニ裨益アリト認ルモノハ博ク撰テ之ヲ採リ云々⁽³³⁾」。

植村の文章の「ベルメル・ガゼット」とは The Pall Mall Gazette のことであり、例えばその一八九〇年一〇月二〇日付(七九八三号)には「社会の救世主としての救世軍人たち⁽³⁴⁾」と題し、ブースの『最暗黒の英国とその出路』に関する記事が掲載されていた。

以上二種の雑誌に掲載された論説に関する調査をこれまで記したが、石井十次が救世軍のことを知るに至った経路としては他にもあり得たと考えている。それは一八九〇年(明治二三年)十一月に日本に到着し、翌年四月から「松江に於て、働を始めた⁽³⁵⁾」パークレー・バックストンから得たと思われる救世軍の知識である。

ビ・ゴットフレイ・バックストン著『信仰の報酬』(昭和二九年)には「松江は日本の南西海岸北方日本海に面する人口五万の都会

である。神戸を立つて、鉄道の終点、岡山に着いた。こゝから松江までは、あと百哩を自転車によらなければならない⁽³⁶⁾とあり、また松江に宣教師として赴任する前の出来事として、「バークレーが宣教師や日本の婦人らに授けていたバイブル・リーディングや、通訳付で日本人クリスチャンや未信者にしていった説教が、忽ちにして凄じい感動をもたらした⁽³⁷⁾」と記されている。この明治二四年四月の松江赴任以前に、鉄道の終点であった岡山駅に初めて下車し、松江に向けて旅装を整えるまでの期間にバークレー・バックストンが岡山市内で行なった通訳付きの説教を聞き、彼と親しく交わったクリスチャンが多くいたわけであるが、それに先立ち石井十次は自ら神戸まで出掛けて、三月二六日にはバックストンに面会していた。そうした機会に口頭で石井はバックストンからブースの救世軍⁽³⁸⁾について聞いていたと考えること、またそれ以後バックストンが岡山に出向くごとに親交を深めていたと想像することはそれぞれ許されることではないだろうか。岡山は交通の要所であった⁽³⁹⁾。

三、ブース大將著『最暗黒の英国とその出路』について

一言で評すれば、一八九〇年に出版された『最暗黒の英国とその出路』は決して単なる救世軍の宣伝のための書物ではなかったということがある。二部構成の同書の第一部「暗黒」は英国が今どういう症状を呈しているかに関する診断書であり、第二部「救出」は救世軍自身が人々の健康を取り戻すためにどのような薬餌を処方して来たかの経過⁽⁴⁰⁾、あるいはこれからの計画に関する報告書であったと言える。救世軍そのものに興味を覚えない人であっても、同書が問題とする一九世紀後半の英国の現状分析の側面においては無視することの出来ない重要な出版物であり、まさしく「これは先頃欧米諸国で評判になっている書物」だったのである。

英国の現状としての人々の貧困、その貧困に対処する援助のあり方として、ブースはどう語っているか。本文に先立つ序文においては、人々を取り巻く環境を変えると同時に、貧困に陥っているその人自身を変えることが必要だとの認識が語られている。貧困に苦しむ人の「悪しき習慣⁽⁴¹⁾」を変えずに援助を行なっても、人は貧困の状態から抜け出すことが出来ない、との命題である。救世軍がとくに

問題視する「悪しき習慣」とは飲酒であり、貧困からの脱出方法とは禁酒であり、禁酒を手助けするのは救世軍という組織の力ということになるが、ブース自身の言葉を引用すれば、「私が唯一つ願うことは（中略）イエス・キリストを通しての聖霊の力による個人の再生ないし改造である」⁽⁴²⁾。

そして本文ではまず初めに当時の大きなニュースであった暗黒大陸アフリカの探検記に言及し、「最暗黒の英国には、最暗黒のアフリカと同様に、マラリアの臭気が漂っている」⁽⁴³⁾と同書のタイトルの由来を紹介し、第一部第一章「なぜ『最暗黒の英国』なのか」、第二章「極貧層」、第三章「ホームレス」、第四章「失業」、第五章「奈落の淵で」、第六章「悪しきもの」、第七章「犯罪者」、第八章「零落した人たちの子供たち」そして第九章「援助はないのか」という角度から貧困の現状が分析される。

これを受けて第二部第一章「途方もない企て」、第二章「救助へ！——都市植民地」、第三章「郊外へ！——農村植民地」、第四章「ニュー・ブリテン——海外植民地」、第五章「さらなる十字軍」、第六章「一般的援助」、第七章「為し得るのか、かついかにして」そして第八章「実際の結論」という内容になっている。先に記したように、明治二十四年二月二〇日に石井十次が読んだと『日誌』に記している同年二月発行『六合雑誌』（第二二二号）掲載記事「將軍ブース氏廢人利用策」に関して言えば、『最暗黒の英国とその出路』全体をカバーする内容となっているが、本稿では当該記事のなかで表題の「將軍ブース氏廢人利用策」の、その「廢人利用」に当たる個所に焦点を絞り、雑誌記事と原文の比較を試みたいと思う。

まず『六合雑誌』にはこうある。すなわち、

「氏は又此問題を解釈するの主眼として名けて曰く廢人利用、此世は神の世界にして廢人廢物あるべきにあらず若し之を利用するの道を發明するを得ば今日の廢人廢物は変じて国家に大用を為すものとならん仮令バコルタルなるものハ各製造場の汚穢物にして其始末に於て尤も困難するものなり然れどもセーミ家が之を変化して一の染料を造るに至りし以来又廢物に非ずして文明の有物となれり云々」⁽⁴⁴⁾。

これに対して原文では「廢人廢物」は例えばこういう形で表れている。すなわち、

「(前略) 科学の勝利は廃材 (waste material) 利用と大きく関係しているので、私はこの人間が作り出した廃棄物 (waste human product) 利用のなかで実現される役立つものへの望みを失うことはない。わが国の製造業者には呪わしき薬物たる廃棄物 (refuse) は、化学者の手で扱われる時には、われわれに虹の色相に愛らしさと多様さにおいて匹敵する染料を供給する材料であった。もし科学の錬金術が美しい色をコールドールから抽出することが出来るならば、神の錬金術が喜びと輝きを悩める心から、また暗く、悲しく、愛の枯渇が運命付けられた無数の命から、引き出すことは不可能なことなのか」⁽⁴⁵⁾。

「(前略) 彼はとくに非組織労働力 (unorganised labour) の編成の責任を帯びている士官であり、常時警戒態勢を取り、その管区内の廃棄された人材 (waste human material) の最良の利用策を考量している」⁽⁴⁶⁾。

「それぞれの家に対しては、雇い人が残飯 (waste food) を貯めておくことの出来る容器をある便利な場所に置いておいて構わないとの許可が求められ、また同様に何らかの類別の文字が記された袋が紙、ぼろ (rags) その他のために提供されるだろう」⁽⁴⁷⁾。

「現在のところ、この廃棄物 (waste) の多くはごみために捨てられ、病気が感染し、病気の発生源となっている」⁽⁴⁸⁾。

「わが家計救難隊を、前述の通り、ほとんどの資材 (material) を収集する見込みがあるいずれかの管区内で、最初、組織化する際には、わが軍服を着用した収集人たちは一日置き、ないし一週間に二回、二輪の手押し車で、あるいは荷馬車で訪問することになる。これらの人々は厳格な軍律のもとにあって、人員登録されているので、こうしたことがされていなければ通常のそうした訪問者たちが時として犯す悪用を防ぐ手立てを、家計担当者は保証されることになる」⁽⁴⁹⁾。

「現在のところ、多少とも不安定な生活のなかで不定期に訪ねて来る屑屋 (rag-and-bone man) は、用心深い主婦らには疑いの

目で見られている。彼女たちは彼が多くの場合廃品 (refuse) を、価値のある何かを見つけ出す『つまみ取り』の機会を得るために収集し、もし彼が恥知らずであつたり、杜撰であつたりした時に、彼女たちが訴えることが出来る權威がないことを恐れている。わが隊のもとでならば、各管区はその上級士官に対して自ら服従する人員登録された士官が所属しており、この上級士官にはいかなる苦情も寄せられ得るのである云々⁽⁵⁰⁾」。

「ここで私にはホテル料理の食べ残しを収集する『貧者の幼き妹たち』ないし他のいかなる人々そして他の慈善目的の団体を妨害するつもりはないということ言わせて頂きたい。私の目的は私の隣人たちの領域を荒らすことでもなく、あれこれの供給源の支配権をめぐるような争いの一方の当事者になるつもりも全くない。既に利用されているものはことごとく私の世界の外側にあるものと看做している。征服されていない廃棄物 (waste) の未開地は、わが隊の作戦にとつて十分に広い」⁽⁵¹⁾。

「わが家計救難隊によつて収集される食物であれば、それは大部分人間が消費するために使われるものではない。この点には最大限の注意が払われ、残り物は、もし可能ならば、はしけによつて河を下り、農村植民地に送り出されることになる云々」⁽⁵²⁾。

「われわれは今や再生過程 (regenerative process) の第三にして最終の段階に到達する。海外植民地である」⁽⁵³⁾。

「この計画に対してなされるであろうもう一つの反論は、既に海外にある植民者らがわが国の廃棄された労働力 (waste labour) の彼らの国への移送の将来を、常に警戒心を抱いて、見るであろう、という点である。何故にこの誤解が生ずるのだろうかを理解することは容易なことであるが云々」⁽⁵⁴⁾。

「(前略) この国の全余剰人口 (entire surplus population) の移送は可能であるのみならず、時の進展と共に、人々自身にとつ

て、この国と人々を受け入れる国にとって、莫大な利益がもたらされるものともなるであろう⁽⁵⁵⁾」。

「いかなる移民 (emigrant) といえども、人柄、勤勉さ、また適性を抜きにして、移民者が負担する費用が支払われる外国からのいかなる申込への応答として送り出されることはないであろう⁽⁵⁶⁾」。

以上原文から抜粋してみたが、ブースの著書では「廃棄された」(waste) という用語は、人間の活動の結果として排出される「廃棄物」という意味で使われる場合と、その活動をする本人が「廃棄」の対象になるという失業者、余剰人口という意味で使われる場合の、その両方に使用されていることがわかんと思う。前者の「廃棄物」ということでは、今日言うところのリサイクルの問題が、また循環社会の問題が一九世紀末に意識されていたということになるが、労働の主体である人間については、その「再生過程」として国内の都市植民地、農村植民地、海外の植民地への移民が、当該移民者の「人柄、勤勉さ、また適性」を含めて、構想されていたことを知ることが出来る⁽⁵⁷⁾。この後者の人間自身の営みに係わる側面を「廃人利用策」と日本語に翻訳することには、抵抗を覚える。実質は失業者対策あるいは弱者救済であつたわけであるが、物質の循環と同じ用語、同じ枠組で社会現象、そしてそれに対応する社会事業を分析し、実践しようとする方法論を、ブースの『最暗黒の英国とその出路』は取っていたと解釈すべきであるように思われる。

石井はそうした方法論的背景を持ったブースの書物を山本徳尚に訳述してもらい、前記の明治二四年二月発行『六合雑誌』の「將軍ブース氏廃人利用策」にも引用されていた箇所を同志社病院からの退院も間近かな明治二五年五月二八日の日誌に「ブース氏救貧論をさく」として書き取っていた。山室軍平による筆記を転載したものだと思われる。かつて読んだ『六合雑誌』の記事のことを思い出すことはなかったであろうか。すなわち、

「社会の廢民を救助するは猶ほ恰も化学者が廢物を以て種々の色素或ひは有益物を製造するが如し即ち之れが各分子を一の結晶体として組織するにあり之れを一の組織体として運動する時は実に易々として成就すべきなり⁽⁵⁸⁾」。

そう記す石井は〈物質の循環と同じ用語、同じ枠組で社会現象、そしてそれに対応する社会事業を分析し、実践しようする方法論〉

をこの明治二五年の段階では受容していたようにも見えるが、それに続いて「廢人利用貧民社会の救助策たる其の精神に至つては即ち一なり然れども文明の度異なる所の英国と我邦とは自ら其の方法に異なるところなかるべからず／予が曰今の救貧策は／（第二）孤児院を設立して之れを先導となすこと／（第二）孤児の成長児を以て工業を起し之れに商業を付帶し商工業を以て武器とし云々」⁽⁵⁹⁾と記している。たしかにスケールの大きなブースの構想に会い、石井は孤児救済に自己限定をし、その孤児に関して「商工業を以て武器とし」との方針を明治四〇年代の大坂事業に至つて実現させているが、しかし明治二四年の段階で石井は東洋救世軍を旗上げし、ブースに倣わんとしていたことも事実である。孤児救済に限定されない東洋救世軍の活動への注目、本稿に先行する山本浩史論文には欠けているように思われる。

四、おわりに

宮崎県児湯郡木城町所在の石井十次資料館の所蔵図書の中に、英文で記された次の一冊がある。表題はMR. ISHII AND HIS ORPHANAGE. A Japanese Apostle of Faith AND HIS ASYLUM AT OKAYAMA. By James H. Petree. Printed at the Asylum Press, Okayama, Japan, 1894.である。見開きの第一ページには筆で「明治二十九年三月十三日 甚作 呈道兄百田重一君」と記されているが、「甚作」とは恐らく著者ペテールのファーストネームJamesの漢字表記の署名であるように思われる。

その贈呈の宛名書きの次のページには石井十次一家の写真が左側に、その右側に先の表題が印刷されているが、石井十次資料館の当該所蔵図書にはその写真の下に手書きの文字でMR. ISHII & FAMILYとある。そして、これと同一の写真がロンドンの救世軍資料館が所蔵する救世軍機関誌ALL THE WORLDには「キャプテン・イッシュ・イッシュ・ファミリー」Mr. Ishii & Familyと記されている。記されて、その第二一巻一九〇〇年（明治三三）五月号三〇三ページに掲載されている。

一八九四年（明治二七）に岡山孤児院で印刷された本文五五ページの英文冊子MR. ISHII AND HIS ORPHANAGEがもし日本の救

世軍からロンドンの救世軍本営に送り届けられていたとしても、日本の救世軍の活動報告の一つとしてではなかったはずで、実際ロンドンの救世軍資料館の日本関係所蔵資料のなかには、私が二〇一〇年一月に調査した際には見受けられなかった。とは言え、本稿では同英文冊子が岡山からロンドンに送られていたか否かは問う事柄ではない。ここでは、石井十次一家の写真は少なくとも当時の救世軍本営にとって、その機関誌における日本紹介の記事のなかで、まさに日本を紹介する「典型的な日本人の家族」として扱われる存在であった、という点を確認しておきたい。

ロンドンの救世軍本営にとって重要であったのは、日本の救世軍の指導者山室軍平⁽⁶²⁾であり、日本の救世軍の活動を支援する男爵渋沢栄一⁽⁶²⁾であり、陸軍元帥大山巖⁽⁶³⁾であったことを ALL THE WORLD の記事から知ることが出来る。同誌上で渋沢、大山は救世軍の「友」の一人として紹介されていたのである。またこれは山室軍平がちょうど海外出張中の出来事であったが、明治四十二年六月一日に岡山孤児院大阪事務所に日本救世軍司令官ホッター少将より書面が届き、「東洋救世軍」に関して「救世軍以外の名義を付せられんことを」⁽⁶⁵⁾求められていた。

この東洋救世軍という名称は、前記のように山室の、石井に対する追悼の辞にも石井の履歴に係わる事柄として言及されていたのであって、少なくとも山室自身は石井を救世軍の「軍友」と呼んでいたのである。そうした事情が、山室の友情を越えて広く当時の日本の救世軍全体に知られていなかったためかも知れないが、歴史的事情ということ言えば、逆に石井と東洋救世軍に関しては北アメリカの救世軍によってそれとして認知されていたことを、われわれは WAR CRY. An Official Gazette of The Salvation Army Pacific Coast Edition. No.338. San Francisco, May 19, 1894, p.8 に掲載の記事 JAPAN. A Sketch of J. Ishii, His Orphanage and Native “Salvation Army” のなかで読むことが出来る。その一節を訳出しよう。『ウォー・クライ』（太平洋沿岸版）の記事である。まず編集人のコメントである。すなわち、

「(前略) 救世軍の名声が日本に到達し、これに倣った運動が岡山孤児院の若者たちによって開始されている。われわれはここでその指導者と彼の業績について説明しよう。救世軍の思想は日本人の精神を見事に捉えているように思われ、先遣隊が新たな戦場に到達する時に、神が彼らに人々の心を与えられんことを祈り願わせたまえ」⁽⁶⁶⁾。

この編集人の言葉に続き、一八九三年八月二五日付の岡山孤児院石井十次からの手紙（小野田鉄彌による英訳⁽⁶⁾）が紹介されている。すなわち、

「シャーウッド様／主による親愛なる兄弟よ、私はあなたの親切なる御手紙を大いなる感謝の念と共に拝受致しました。私は私どもの小さな軍について以下の説明をあなたに申し述べます。すなわち、『東洋救世軍——その小史』です。／一八九一年二月二五日は主の日でした。その日私は主の広大無辺の栄光と愛によつて格別に動かされ、この岡山の地で福音の説教に関する何百もの一枚摺りのビラや小冊子を日曜日ごとに配るという計画に導かれました。当時私の下には一四〇名の子供たちがおりました。／（中略）私どもが一六〇〇枚の説教文を初めて印刷したのは二月二五日でした。次の日曜日、三月一日ですが、男女合わせて三〇人の子供たちから成る私どもの小さな救世軍は、何百発の弾丸（説教文）を携え精神的な戦闘に出向きました。これが私どもが戦った初陣であり、私どもの救世軍の端緒でした。／それ以後日曜日ごとに私どもの一団は戦闘に出陣しました。同じ年の一〇月二〇日には高梁教会記念祭がありましたが、同教会は創立一〇年だったのです。高梁は備中の小都市で、岡山からは三〇マイルの距離でした。とても良い機会でしたので、二〇〇〇発の弾丸を携えて同地に出向きました。私どもは一週間滞在し、主の旗の下いくつかのやり方——路傍伝道、説教文の配布そして個人的なやりとり——で数日間戦闘しました。この小さな町は完全に興奮のるつぽでした。その機会には当地岡山のミッシヨンスクールの学生たち数名が参加しました。／この時から私どもの軍は東洋救世軍との名で知られるようになりました。（後略⁽⁶⁸⁾」。

この『ウォー・クライ』（太平洋沿岸版）の一節は、まさに本稿「一、はじめに」で紹介した明治二四年十一月一二日発行『福音新報』第三五号掲載の「高梁教会十年期祝会」の記事の内容と合致するものであり、その「十年期祝会」が石井十次の岡山孤児院の対外的活動が「東洋救世軍との名で知られるように」なる第一の機会であり、続いて第二の機会が訪れた。同じ石井十次からの手紙はこう述べている。すなわち、

「私にはより大きな業績を準備することが素晴らしき神の節理であつたと思われます。一〇日も過ぎぬ間にわが国の中部地方に恐ろしい地震がありました。岐阜と愛知に被害をもたらし地震が起きたのは一八九一年一〇月二八日のことでした。想定される

震源地から何マイルもの距離で無傷の家屋を発見することは出来ないほどに悲惨なものでした。何千もの男女が生き埋めとなり、焼死しました。かくてこの国は、大変ひどく打ちのめされました。／この大変に悲しむべきニュースが私どもの耳に届いたのは一月一日でしたが、その時私どもは日曜学校を開いておりました。日曜学校を終えてから、私どもは祈りあるいはまた瞑想の場所として使っている墓地に移動し、主の導きを静かに祈りました。主は私の祈りのなかで私に救助基金のための募金に出掛ける決意を促したのです⁽⁶⁹⁾。

この一節も、本稿「一、はじめに」で紹介した明治二四年度『石井十次日誌』巻頭に掲載されている、岡山日報に載った「岡山孤児院内東洋救世軍」の「岐阜愛知等震害地孤児義捐金」報告書と合致する内容であった。

以上本稿は明治二四年、二五年当時の石井十次と救世軍の關係に限って議論をして来た。明治二九年度『石井十次日誌』一〇月三日の箇所には日本救世軍司令官として「全権を余に託せば云々⁽⁷⁰⁾」といった箇所、また明治三五年度『石井十次日誌』三月一九日の箇所には「救世軍はもはや旧き酒となれり 彼等は日本魂を救ふこと能はざる可し⁽⁷¹⁾」とあり、これらの発言に関してはまた別の資料に基づく、別の考察が必要と思われる。

注

- (1) ロンドンの救世軍資料館では、The Salvation Army International Heritage Centre, William Booth College の下であり、所在地は Denmark Hill, London SW5 8BG, UK である。
- (2) PUBLICITY BROCHURE-JAPAN TERRITORY.
- (3) 慶應義塾大学三田図書館が所蔵する原本の奥付に相当する箇所には IN DARKEST ENGLAND AND THE WAY OUT-BY GENERAL BOOTH-CHICAGO. LAIRD & LEE, PUBLISHERS 1890 とあり、何月の出版かは記されていない。ただしその序文の最後に WILLIAM BOOTH, INTERNATIONAL HEADQUARTERS OF THE SALVATION ARMY, LONDON, E.C. OCTOBER, 1890. とあるのは、本稿では一八九〇年秋の出版とした。
- (4) 明治二五年度『石井十次日誌』（石井記念友愛社、昭和三五年）一二六ページ。

- (5) 同右、一三〇ページ。
- (6) 同右、一三九ページ。
- (7) 山室軍平『石井十次君』（高鍋町立図書館、昭和五八年）二ページ。なお山室に関しては同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』（同朋舎、一九九一年）、また『山室軍平―日本の説教5』（日本キリスト教団出版局、二〇〇三年）への朝野洋の「解説」参照。
- (8) 明治二五年度『石井十次日誌』一五五ページ。
- (9) 『聖書之友月報』（第三八号）一〇〇―一二ページ。
- (10) 『六合雑誌』（第一二二号）三九―四二ページ。
- (11) 明治二四年度『石井十次日誌』三二八ページ。
- (12) 同右、三四六ページ。
- (13) 『福音新報』（第三五号）五―六ページ。なお、この『福音新報』には石井の東洋救世軍に関して、続く第三六号（明治二四年一月二〇日）、第三八号（同年二月四日）、第三九号（同年二月一日）においても報じられている。すなわち、高梁教会十年期祝会の統報としては「（明治二四年一〇月）二三日は全じく会堂に於て岡山英語学校生徒と全孤児院孤児の演説会を夜七時より開き十一時に閉づ四時間の長演説なるも聴衆は倦まず厭はず謹聴せしは驚くべきことなる（中略）当市人民の感動されしは此度程大なるはなかりき実に東洋救世軍の功また著しと云ふべし」（第三六号、四ページ）、「関西各地救済に関する一般の感情は非常なる者の由にて岡山孤児院の如きは震災地の報達するや直ちに例の救世軍を組織して刷物を配布し義捐金を募集したるが是れが為め大に同地の人心を動かし日を出でずして千円余の金を得られたり云々」（第三八号、五ページ）、「其後岡山孤児院よりは東洋救世軍に属する青年二人来りて震災孤児救済の為め金品の義捐を求め教会の兄弟大に力を尽し云々」（第三九号、七ページ）。なお『高梁教会二二〇年史』（二〇〇二年）には、この「十年期祝会」についての言及は見られない。
- (14) 山室軍平『石井十次君』二二ページ。
- (15) 同右。
- (16) 島貫兵太夫に関しては、『ときのこと』復刻版（不二出版、一九八七年）への室田保夫の「解説」（二ページ）を参照されたい。
- (17) 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八年）七五二―七五三ページ。
- (18) ホイトニー夫人、梶夫人共著『ドクトル・ホイトニーの思ひ出』（編纂兼発行者ジョージ・バーナム・プレスウエート、発行元基督教書類会社、昭和五年）一〇五―一〇六ページ。なお表紙の上部には次の英文が記されている。すなわち「REMINISCENCES OF WILLIS NORTON WHITNEY, M.D. BY MRS. M.C. WHITNEY AND Mrs. [sic] CLARA W. KAJI」。
- (19) 同右、八四―八五ページ。

- (20) 同右、一五一ページ。
- (21) 『日本近現代人名辞典』(吉川弘文館、二〇〇一年) 六一九ページの「竹越与三郎」の項参照。
- (22) 「救拯軍の女將軍 ブース夫人伝」、『聖書之友月報』(第三八号) 一〇ページ。
- (23) 同右。
- (24) 佐波亘『植村正久と其の時代』(教文館) 第三卷、四〇四〜四〇五ページ。
- (25) 同右、四〇八〜四一〇ページ。
- (26) 同右、四一一ページ。
- (27) 同右、四一三〜四一四ページ。
- (28) 「將軍ブース氏廃人利用策」、『六合雜誌』(第一二二号) 一一ページ。
- (29) 同右、六ページ。
- (30) 雨宮栄一『戦う植村正久』(新教出版社、二〇〇八年) 七二〜七三ページ。
- (31) 佐波亘『植村正久と其の時代』 第三卷、四六二〜四六三ページ。
- (32) 同右、四六四〜四六五ページ。
- (33) 同右、四二五ページ。
- (34) 「The Salvationist as Saviour of Society, "The Pall Mall Gazette," London, England, Monday, October 20, 1890, Issue 7383.
- (35) 小島伊助訳、ビ・ゴットフレー・バックストン著「信仰の報酬」(発行人 落合健二、発行人 バックストン記念霊交会、昭和二九年) 八一ページ。
なお同書序言一ページ目に次のように原著が英文で紹介されている。すなわち「THE REWARD OF FAITH in the life of BARCLAY FOWELL BUXTON 1860-1946 by B.GODFREY BUXTON "he is a rewarder of them that diligently seek him" LUTTERWORTH PRESS LONDON」。
- (36) 同右。
- (37) 同右、七四ページ。
- (38) 山室軍平『私の青年時代』(発行者 救世軍本営、発行人 救世軍出版供給部、昭和四八年) 一一〇ページに、「私は同氏(バックストン)を訪問した際、そこで始めて、英国救世軍発行の“The War Cry”(ときのこえ)を見たのを覚えている」とある。同様な経験を石井十次もしていたのではない。なお、バックストンを含め、明治期のイギリス人の宣教師に関して Helen Ballhatchet, *British Missionaries in Meiji Japan, Britain & Japan: Biographical Portraits*, edited by Ian Nish, Japan Library, 1994, pp.34-44 を参照。
- (39) 都田恒太郎『バックストンとその弟子たち』(バックストン記念聖会、昭和四一年) 一〇一ページには明治二四年四月にバックストンが松江に赴

任した当時「神戸から松江に行くには、山陽線経由で津山まで行き、人力車で、今日の伯備線が通っている道を行き、中国山脈を進み云々」とあるが、岡山・津山間に鉄道が敷かれたのは明治三二年なので、この都田の記述は誤りである。岡山まで山陽鉄道が伸びたのが明治二四年三月であつて、当時バックストンが岡山にて下車を強いられたことは、前注(36)の通りである。

(40) 上の点に係わる出版物に、William Booth, "Twenty-One Years' Salvation Army," London: International Headquarters, 1891がある。

(41) General Booth, "In Darkest England and Way Out," Chicago: Laid & Lee Publishers, 1890, Preface p.8. なお手元にある同書の翻刻本でIndyPublish.com, Boston, Massachusetts にある二〇〇七年に出版されている版は正確な翻刻とは言えず、特にその序文には原本にはあるページ数の記載が欠けている。本稿では序文の箇所からの引用に関しては、原本には振られているページ数をPrefaceと付記して表記した。そうした付記がないページ数表記は本文の方のページ数表記である。また同書の翻訳としては山室武甫訳『最暗黒の英国とその出路』(出版者 救世軍本営、発行 相川書房、一九八七年)が既にあるが、本稿での訳文は拙筆によった。しかし同訳書の訳者解説には、本稿で触れたウィリアム・ステッドが同書成立に関係しているとの貴重な情報も記されており、参照されたい。

(42) *Ibid.*, Preface p.9.

(43) *Ibid.*, p.14.

(44) 「将軍ブース氏廃人利用策」『六合雑誌』(第一二二号)四〇ページ。

(45) General Booth, "In Darkest England and Way Out," p.8.

(46) *Ibid.*, p.114.

(47) *Ibid.*, p.117.

(48) *Ibid.*

(49) *Ibid.*, p.118.

(50) *Ibid.*

(51) *Ibid.*

(52) *Ibid.*, p.119.

(53) *Ibid.*, p.143.

(54) *Ibid.*, p.144.

(55) *Ibid.*, p.148.

(56) *Ibid.*, p.151.

(57) 都留信夫・都留敬子訳、マーガレット・ハンフリーズ著『からのゆりかご——大英帝国の迷い子たち——』（日本図書刊行会、一九九七年）に「この子供たちは慣れ親しんだもの、くつろげるもの、よく知っているもの、こうしたすべてから引き裂かれて、英連邦諸国にある諸々の施設や孤児院の欠員を埋めるために、地球を半周して連れ去られたのである。」／「子供たちはそうとは知らず、英国の児童移民運動の最後の波に乗って行ったのである。一世紀かそれ以上もの間、バーナード博士学園、救世軍、その他キリスト教諸団体は、子供たちを貧困と不幸から引き抜いて外地の子供の家に送り出してきたのだ」（七八ページ）とある。移民者の「人柄、勤勉さ、また適性」を考慮するというブースの主観的意図はそれとして評価したい。

(58) 明治三十五年度『石井十次日誌』一四六ページ。

(59) 同右。

(60) 山本浩史「石井十次の内面における『廃民』『殖民』観念の成立」、『社会福祉学』第四九巻第二号、二〇〇八年。

(61) *ALL THE WORLD*, Vol. XXV, No.8 August 1904 に掲載された「FROM THE UTTERMOST EAST」のキャプションがある集合写真には Staff Captain Yamamuro かつ Colonel Bulard かつ並んで写っている。

(62) FRIENDS OF THE ARMY. — XXI. BARON SHIBUSAWA, *Ibid.*, Vol. XXVIII, No.9, September 1907, pp.463-465.

(63) FRIENDS OF THE ARMY. — LIII. MARSHAL OYAMA, *Ibid.*, Vol. XXXI, No.5, May 1910, pp.238-239.

(64) 『ふきのこ』第三二八号（明治四二年八月一日発行）八ページの広告欄に「山中佐愈々帰朝す／約半歳を海外に費されたる云々」とある。

(65) 拙稿「出入橋と愛染橋の明治四二年から四四年——岡山孤児院大阪事務所の日誌——」、『慶應義塾大学日吉紀要社会科学』第一四号（二〇〇三年度）一四ページ。また拙稿「岡山孤児院大阪事務所日誌を翻刻して」、「石井十次の残したもの——愛染園セツルメント二〇〇年」石井記念愛染園隣保館、二〇一〇年、二一九ページの注（5）参照。

(66) JAPAN. A Sketch of J. Ishii, His Orphanage and Native "Salvation Army," *WAR CRY. An Official Gazette of the Salvation Army Pacific Coast* Edition, No.338, San Francisco, May 19, 1894, p.8.

(67) *Ibid.*

(68) *Ibid.*

(69) *Ibid.* なお『聞声』（日本東京救世軍本営）明治二九年六月二〇日発行（第六〇号）第一ページに「石井十次君の来訪」の記事があり、そのなかに石井が明治「二十四年の暮美濃尾張に大震災の有るに際し数千円の金を集め八十人の孤児をば飢寒の中より救ひ云々」との記述が見られる。

(70) 明治二九年度『石井十次日誌』三二六ページ。

(71) 明治三五年度『石井十次日誌』二四ページ。

付記 本研究は平成二十二年度科学研究費補助金「岡山孤児院の国際性と実践内容の質的分析に関する総合的研究」(研究代表者福岡県立大学教授細井勇)より研究補助を受けた。また一八九四年五月一九日発行の週刊誌『ウォー・クライ』(太平洋沿岸版)については、山室軍平記念救世軍資料館の館長朝野洋先生からその複写物を頂戴した。さらに二〇一〇年一月のロンドンの救世軍資料館への出張調査に際しては、日本国軍救世軍本営伝道事業部長少佐樋口和光氏、ロンドンの救世軍資料館のアーキビストたるスティーブン・スペンサー(Steven Spencer)氏よりご好意を賜った。ここに記して共に謝意を表する次第である。